調剤薬局
かく動く

残薬管理による薬剤費節減への取り組み（第1回）

有限会社ファーマティカ　たけの薬局　管理薬剤師　齋藤勝裕

＜当社の取り組み＞

最近は読み易い薬剤師向けの情報誌が増えたと思います。私はその中でも、薬局を紹介したような記事が好きです。なぜなら、そこに登場する薬局には、それぞれの理念に基づき様々な努力や工夫を凝らして立派に活躍している薬剤師がいて、そのことが私自身の励みとなり、やる気にさせてくれるからです。このような情報誌は、薬剤師の仕事の方向性を指し示してくれていると思います。当薬局もそれらを参考にして、できることを誠実に丁寧に行えるよう心掛けています。

そもそも私達が目指してきたことは、薬剤師としての職能を生かして地域の皆様に貢献することでした。当薬局も開局して5年が経ち、ようやく処方医師や患者さんに信頼を得られるまでになったと思います。

当社の取り組みのひとつに学会活動があります。それは毎年1回、公の場で発表することです。このことが、薬剤師としてのモチベーションを高め維持するためにも役立っていると思います。実際、私自身の仕事も注意深くなり、色々考えながら仕事を見直すことで、面白いテーマやアイデアを見出すことができました。日常業務の些細なことにも気をとめ、当たり前と思えることでも視点を変えてほんの少し掘り下げて調べてみることで、様々な問題点や改善点に気が付き、私達薬剤師間や処方医師・患者さんとのコミュニケーションが活発になりました。このようにして、現在までに服薬指導とコンプライアンスというテーマで8回、福祉用具のテーマで1回、日薬学術大会で発表を行ってきました。

調剤薬局
かく動く

残薬管理による薬剤費節減への取り組み（第2回）

有限会社ファーマティカ　たけの薬局　管理薬剤師　齋藤勝裕

＜残薬へのアプローチ＞

私がテーマに選んだことは、残薬に注目した『小回りの利く薬局』でした。

きっかけは、使い残しの薬が処方医師に言えずに大量に溜まって処分に困った患者さんの相談を受けたことでした。薬を医師が意図した通りに使用してもらうのが原則であり、当薬局でも適切な指導をすることにより、服薬コンプライアンスの向上を実践してきました。しかし、それでも残薬は発生し、服薬トラブルや廃棄されていた薬もありました。余ってしまう薬の裏側にある理由を解析することが、本来の分業の利点である薬の適正使用に繋がり、薬剤師が医療費の節減に寄与できる方法の一つであると思いました。そこで、患者さんの残薬管理の手助けをすることで、具体的には残薬をその患者さん本人に再利用することでどれだけの薬剤費が節減できているかを調査しました。

この調査には、既に在宅で実践していた訪問薬剤管理指導の残薬管理方法を応用しました。まず数値化するにあたり、調査の対象を、薬剤師による残薬管理の手助けが有効となりやすい慢性期の一包化調剤を施している患者さんに限定しました。そして、薬の管理方法をある程度統一してもらう指導から始まりました。次に、面倒でも飲み忘れなどで残った薬を薬袋ごと全て持参してもらい、薬局側で残薬を直接チェックして、必要な情報を服薬情報提供書などにより処方医師へフィードバックをしました。そして、次回処方受付時に再利用された薬剤を薬価ベースで集計し、節減できた薬剤費として算出しました。

調剤薬局
かく動く

残薬管理による薬剤費節減への取り組み（第3回）

有限会社ファーマティカ　たけの薬局　管理薬剤師　齋藤勝裕

＜200億円の節減効果への期待＞

かかりつけ薬局の薬剤師として、患者さんのニーズを的確に把握することは重要です。最近は医療費に対する意識改革が患者さんにも浸透してきたと思います。残薬の活用は医療費の無駄を患者さんに意識させ、薬局側で積極的に行えるサービスのひとつだと考えます。

今回の調査では、在宅患者を含めた78人に協力を求め、4ヶ月間の調査を行った結果、対象患者の総薬剤費の1.07％にあたる4万2,217円の薬剤を再利用することができました。余っている薬すべてが無駄になっていた訳ではないと思いましたが、この結果により、残薬を上手く活用することで薬剤費の約1％の無駄を無くすことができたのでは？と考えました。

医療費の節減のために薬剤師ができるあるいはしなくてはいけないことは他にも色々あると思いますが、今回は残薬の確認という、今まで十分にはできていなかったことに焦点を当てることで、患者さんに喜ばれるきめ細やかな対応の他に、『残薬を掘り起こし、本人へ再利用する』ことだけでも薬剤費の節減ができるという結果を数字として表わすことができました。

仮に全国的にこのような働きかけを展開すれば、調剤薬局の年間薬剤市場を約2兆円とすると約200億円の節減効果が期待できると試算することもできます。

しかし、基本は残薬を発生させないような管理・指導です。それでも発生してしまった残薬への対応を、服薬事故の防止や薬剤費節減のためにも、いかにきめ細かく積極的に継続できるかが今後の課題となってくると思います。

調剤薬局
かく動く

残薬管理による薬剤費節減への取り組み（第4回）

有限会社ファーマティカ　たけの薬局　管理薬剤師　齋藤勝裕

＜信頼される薬剤師として＞

日本は医療費に占める薬剤費の割合が高いと言われています。今回の調査は薬剤師の職能をアピールし、分業の利点を検証する意味も含めて、残薬管理を通して薬剤費の節減ということに焦点を当てました。そして、処方医師や患者さんと上手くコミュニケーションをとり、手間はかかっても細やかな対応が患者さんにも喜ばれ、結果的に医療費の節減に繋がりました。

しかし、他にも急速な高齢化の進行や生活習慣病の増加、要介護高齢者の増加、健康ニーズの高まりと意識の多様化などが社会的問題になっています。健康創造にむけての薬剤師の役割は大きいと思います。

当社でも介護支援業務を新たな柱としてOTC薬販売や処方箋調剤と共に力を入れています。また地域社会の一員として、実務実習の受け入れや学校薬剤師活動、地域薬剤師会の活動にも積極的に参加しております。

『小回りの利く薬局』として、今後もよりきめ細やかなサービスを実践するために、確かなコミュニケーションに時間をかけていきたいと思います。

当薬局では他薬局との差別化のために試行錯誤した時期がありました。しかし、最近は差別化よりも連携と考えるようになりました。それは競争ではなく協力であり、何よりも患者さんのためにその地域に合ったよりよい薬局が増えていくのが今後の方向性と思ったからです。

そして、それを先導する質のいい情報誌や薬剤師会などの各種団体にも大いに期待したいものです。

〈完〉